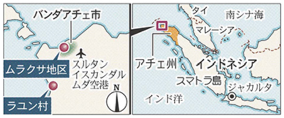
巡回ワークショップ　@インドネシア・アチェ州

むすび塾

被災後8年 悲しみ今も

バンダアチェ市ムラクサ地区

河北新報社は4月23、24日の両日、巡回ワークショップ「むすび塾」をインドネシア・アチェ州の2地区で開いた。国際協力機構（JICA）との共催で、海外での実施は初めて。22万人以上が犠牲になった2004年のスマトラ沖地震＝?＝から8年余り。被災者は今もつらい思いを抱えながら、復興の歩みを進め、地震の記憶を伝承している。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、現地の住民と東日本大震災で被災した「語り部」の3人が、国境を越え、被災後の思いと課題を共有した。



日本政府の支援で建てられたムラクサ地区の津波避難ビルで、現地の住民と東日本大震災の被災者3人が被災体験を語り合った。つらい記憶を思い出し、涙をみせる住民も。市街地には避難ビルなどの位置を知らせる誘導標識も掲げられている

アチェ州の州都バンダアチェ市北部の海沿いにあるムラクサ地区では、23日にむすび塾を開いた。日本の支援で整備された津波避難ビルを会場に、現地の住民約10人が避難行動について話し合った。住民たちは「津波はまた来る」「悲劇を忘れてはならない」などと教訓や課題を口にした。

地区は海沿いの平たんな土地に位置する。スマトラ沖地震では大津波に襲われ、16ある村全てが壊滅的な被害に遭い、住民3万4000人の約9割が犠牲になった。

「みなさん、あの日の体験を聞かせてもらえませんか」。進行役の木村理事長が尋ねると、住民は恐怖や悲しみに声を震わせながら体験を語った。

住民は一様に「津波のことは知らなかった」と口にした。多くは「水が陸に上がってきた」と聞いてから避難を始め、流れる木材や冷蔵庫につかまったり、ヤシの木に登ったりして九死に一生を得たと証言した。

「津波の中を泳ぎながら子どもを捜した」「避難中も水が上がったことが信じられなかった。夫や子が流されて何もできなかった」。住民たちは涙ながらに打ち明けた。被災から8年以上が過ぎたいまも心の傷は癒えていない。

被災後は住民の意向で住宅が現地再建され、住民は1万6861人（11年）まで回復した。ただ、「津波が怖い」などの理由で家が賃貸や売りに出され、新住民が増えた。

昨年4月11日にスマトラ沖で起きたM8・6の余震では、新住民らがパニックになった。地区には日本の支援で津波避難ビルが3棟整備されているのに「高い所より、内陸に逃げようとする傾向が強まっている」（現地の専門家）という。

「どうすれば助かるのか、日本と情報共有して、住民に教えられるようにしたい」と、避難の教訓を分かち合うことを望む声もあった。

イスラム教寺院のザムザミさん(62)は、600年代と800年代に地震津波に見舞われたという古文書があったことを紹介し「津波は今回限りのことではない」と警鐘を鳴らした。

教訓を後世に伝えるため、地区住民は被災した住宅「災害遺構」を自主的に幾つか保存している。木村理事長は「皆さんの体験を代々語り継ぐことができれば、犠牲を抑えられる」と指摘。被災体験を共有する取り組みに期待した。

?　スマトラ沖地震　2004年12月26日（日曜）午前7時58分（現地時間）、インドネシアのスマトラ島北部西方沖でマグニチュード（M）9・1の大地震が発生した。最大35㍍の巨大津波を引き起こし、インド洋沿岸に甚大な被害を与えた。

インドネシア政府がまとめた最終報告書によると、島北部のアチェ州の死者・行方不明者は約22万人に達した。倒壊した建物は家屋が約14万戸、学校3400校、病院500棟に上り、農地7万㌶が被災した。

政府は05年に復興庁を設立し、海外支援を含む総額7000億円を投じて住宅14万戸を再建。道路も3600㌔を補修し、学校や病院も各1000以上が再建された。復興庁は09年に解散した。

アチェでは地震時、独立派武装組織と国軍が内戦中だったが、被災後に和平機運が盛り上がり05年8月に和平合意した。

■むすび塾に参加して

住民から「水が上がってきたぞ」と聞いて避難を始めたが「本当かな」と信じられなかった。津波は第1波より第2波、第3波と高くなった。夫と子どもが流された。今もお祈りをしている。

＝アイヌンさん(46)

アチェの人々は津波の存在を聞いたことがなく、どう行動すれば命が助かるのか、誰も分からなかった。後世に教訓を伝えることができるよう、日本とインドネシアが情報共有することを願う。

＝アンサリさん(63)

地元の古文書には、600年代と800年代に津波があったという記録が残っていた。津波は今回限りのことではない。神様は津波のことを「試練」と言っている。「忘れるな」とも言っている。

＝イスラム教寺院のザムザミさん(62)

津波対策専門家　ムザイリン・アファンさんに聞く

生業支援不足 復興道半ば

インドネシア・アチェ州の住民は復興や防災の現状をどう見ているのか。津波防災の専門家で、シャクアラ大（バンダアチェ市）研究機関のムザイリン・アファン所長に、「むすび塾」に同行した感想や被災地の課題を聞いた。

◇

―むすび塾では日本と現地の被災者が体験を話し合った。

「東日本大震災後、アチェ州の住民は被災体験を共有したいという気持ちが強かった。日本の被災者は『なぜ私だけが…』というつらさに耐えている。20万人以上が犠牲になったアチェの体験を伝えることで『一人じゃない』というメッセージを届けられたと思う」

「現地の住民には、過去に何度も津波被災した日本から学びたいという気持ちもある。参加した住民が最後まで席を離れず、耳を傾けていた姿が印象的だった」

―復興は道半ばという住民の声があった。

「視察して分かったと思うが、政府や非政府組織（NGO）が被災後2年で提供した住宅は、多くが窓ガラスや壁が壊れたままになっている。政府の生業支援策が少なくて、暮らしの復興が遅れ、修繕できないためだ」

「被災後5年で道路や橋などの構造物は復旧したが、住民が社会的、経済的な復興を実感するのにあと5年は必要だと感じる」

―防災対策は進んでいるか。教訓の伝承は。

「被災後、国が防災庁を創設し、大学もカリキュラムに防災を取り入れた。集落ごとに『災害救援隊』をつくる動きもある。学校の防災教育も含め、いずれもゼロから積み上げている途上だと考えている」

「家庭でも、被災後に生まれた子どもたちにしっかり体験は語り継いでいるが、生活が切迫し、防災対策は進んでいない。生活や教育が優先というのが本音だろう」

―自身もスマトラ沖地震で両親と兄弟4人を失った。つらい体験をどう受け止めてきたか。

「長男の私には、残された兄弟を育て上げることが使命だったし、支えになった。イスラムの教えでは災害は神様が与えた試練。困難を受容する精神がある。つらさを乗り越えることが大切とも説いている」

「被災は忘れてはいけないことだが、悲しみをずっと抱えるのも適切ではない。日本のみなさんには双方の感情を大事にしながら、立ち直ってほしいと願っている」

アチェ州出身、バンダアチェ市在住。シャクアラ大のGIS&リモートセンシング開発センター所長を務める。04年のスマトラ沖地震後は東北大に留学し、現在も東北大大学院博士課程に在籍する。42歳。